

ん。

そして毎晩毎晩水引を続けるうちに、すくないながら流れ落ちる水が毎晩館のほとりで全部溜れてしまう事がわかり主水正にうったえ出ました。

主水正は、百姓たちのうったえをきいて首をひねりました。主水正もまた館の上から日毎に色があせて行く稲田を眺めては心配していたのです。

この夜から主水正の部下たちは、ひそかに館の周囲の配置につきました。その夜もふけた丑満ツ（二時）どきの事です。なま臭いいちじんの風が西北の方から吹くよとみるまに、青白く光る二ツの玉が館沢の中にカサコソと音をたてながら入りましたが、みるみるうちに野上川の水がひあがって行きました。

「やはりそうだったか。」報告をきいた主水正はうなづきました。

それは高瀬川の水が日毎にすくなくなるのに気をやんだ神鳴ヶ淵にすむ大蛇が、夜毎に野上川の水を飲みに来るのだとわかりました。その夜は文字通りの五月暗でした。片倉主水正は、部下の弓勢を夕刻から館沢のまわりに伏せ大蛇の来るのを待ちうけました。

時刻もたがわない丑の刻、館沢に入った大蛇は頭を野上川の淵に入れたかと思うと水を飲み始めました。